

神話と地球物理学

寺田寅彦

青空文庫

われわれのように地球物理学関係の研究に従事しているものが、国々の神話などを読む場合に一番気をつくことは、それらの説話の中にその国々の気候風土の特徴が濃厚に印銘されており浸潤していることである。たとえばスカンディナヴィアの神話の中には、温暖な国の住民には到底思いつかれそうもないような、驚くべき氷や雪の現象、あるいはそれを人格化し象徴化したと思われるような描写が織り込まれているのである。

それで、わが国の神話伝説中にも、そういう目で見ると、いかにも日本の国土にふさわしいような自然現象が記述的あるいは象徴的に至るところにちりばめられているのを発見する。

まず第一にこの国が島国であることが神代史の第一ページにおいてすでにきわめて明瞭めいりょうに表現されている。また、日本海岸には目立たなくて太平洋岸に顕著な潮汐ちようせきの現象を表徴する記事もある。

島が生まれるという記事なども、地球物理学的に解釈すると、海底火山の噴出、あるいは地震による海底の隆起によつて海中に島が現われあるいは暗礁が露出する現象、あるいはまた河口における三角州の出現などを連想させるものがある。

なかんずく速須佐之男命はやすさのおのみことに関する記事の中には火山現象を如実に連想させるものがはなはだ多い。たとえば「その泣きたもうさまは、青山を枯山からやまなす泣き枯らし、河海うみかわはことごとく泣き

乾しき」というのは、何より適切に噴火のために草木が枯死し河海が降灰のために埋められることを連想させる。噴火を地神の慟哭と見るのは適切な譬喩であると言わなければならぬまい。

「すなわち天にまい上ります時に、山川ことごとくに動み、国土皆震りき」とあるのも、普通の地震よりもむしろ特に火山性地震を思わせる。「勝ちさびに天照大御神の宮田の畔離ち溝埋め、また大嘗きこしめす殿に屎まり散らしき」というのも噴火による降砂降灰の災害を暗示するようにも見られる。「その服屋の頂をうがちて、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて墮し入るる時にうんぬん」というのでも、火口から噴出された石塊が屋をうがって人を殺したということを暗示する。「すなわち高天原皆暗く、

葦原あしはらのなかつくに 中国くわ ことごとくに闇し」というのも、噴煙降灰による天地晦冥かいめいの状を思わせる。「ここに万よろずの神おとないの声は、狭蠅さばえなす皆涌わき」は火山鳴動の物すごい心持ちの形容にふさわしい。これらの記事を日蝕にっしよくに比べる説もあつたようであるが、日蝕のごとき短時間の暗黒状態としては、ここに引用した以外のいろいろな記事が調和しない。神々が鏡や玉を作つたりしてあらゆる方策を講じるといふ顛末てんまつを叙した記事は、ともかくも、相当な長い時間の経過を暗示するからである。

記紀にはないが、天手力男命あめのたちからおのみことが、引き明けた岩戸を取つて投げたのが、虚空はるかにけし飛んでそれが現在の戸隠山とがくしやまになつたという話も、やはり火山爆発という現象を夢にも知らない

人の国には到底成立しにくい説話である。

誤解を防ぐために一言しておかなければならないことは、ここで自分の言おうとしていることは以上の神話が全部地球物理学的現象を人格化した記述であるという意味では決してない。神々の間に起こったいろいろな事件や葛藤かつとうの描写に最もふさわしいものとしてこれらの自然現象の種々相が採用されたものと解釈するほうが穏当であろうと思われるのである。

高志こしの八俣やまたの大蛇おろちの話も火山からふき出す熔岩流ようがんりゅうの光景を連想させるものである。「年ごとに来て喫くうなる」というのは、噴火の間歇性かんけつせいを暗示する。「それが目は酸漿あかががちなして」とあるのは、熔岩流の末端の裂罅れっかから内部の灼熱部しゃくねつぶが隠見する状況

の記述にふさわしい。「身一つに頭八つ尾八つあり」は熔岩流が山の谷や沢を求めて合流あるいは分流するさまを暗示する。「またその身に蘿こけまた檜ひすぎ生おい」というのは熔岩流の表面の峨々たる起伏の形容とも見られなくはない。「その長さ谿八谷峽八尾をわたりて」は、そのままにして解釈はいらない。「その腹をみれば、ことごとくに常に血爛ただれたりとまおす」は、やはり側面の裂罅からうかがわれる内部の灼熱状態を示唆的にそう言ったものと考えられなくはない。「八つの門かど」のそれぞれに「酒船さかぶねを置きて」とあるのは、現在でも各地方の沢の下端によくあるような貯水池を連想させる。熔岩流がそれを目掛けて沢に沿うておりて来るのは、あたかも大蛇だいじやが酒甕さかがめをねらつて来るようにも見られるであろう。

やそがみ やおなむち 八十神が大穴牟遲の神を欺いて、赤猪あかいだと言つてまづかに焼けた大石を山腹に転落させる話も、やはり火山から噴出された灼熱した大石塊が急斜面を転落する光景を連想させる。

おおくにぬしのかみ

大國主神が海岸に立つて憂慮しておられたときに「海うなばらを光

して依より来る神あり」とあるのは、あるいは電光、あるいはまた

ノクチルカのような夜光虫を連想させるが、また一方では、きわ

めてまれに日本海沿岸でも見られる北光オーロラの現象をも暗示する。

いずもふどき

出雲風土記には、神様が陸地の一片を綱でもそろもそろと引き

寄せる話がある。ウエーゲナーの大陸移動説では大陸と大陸、ま

た大陸と島嶼とうしよとの距離は恒同こうどうでなく長い年月の間にはかなり

変化するものと考えられる。それで、この国曳くにびきの神話でも、単

に無稽むけいな神仙譚しんせんたんばかりではなくて、何かしらその中に或ある事實の胚芽はいがを含んでいるかもしれないという想像を起こさせるのである。あるいはまた、二つの島の間海の漸次に浅くなつて交通が容易になつたというような事實があつて、それがこういう神話と関連してないとも限らないのである。

神話というものの意義についてはいろいろその道の学者の説があるようであるが、以上引用した若干の例によつてもわかるように、わが国の神話が地球物理学的に見てもかなりまでわが国にふさわしい眞実を含んだものであるということから考えて、その他の人事的な説話の中にも、案外かなり多くの史実あるいは史実の影像が包含されているのではないかという気がする。少なくとも

そういう仮定を置いた上で従来よりももう少し立ち入った神話の研究をしてもよくはないかと思うのである。

きのうの出来事に関する新聞記事がほとんどうそばかりである場合もある。しかし数千年前からの言い伝えの中に貴重な真実が含まれている場合もあるであろう。少なくともわが国民の民族魂といったようなものの由来を研究する資料としては、万葉集などよりもさらに以上に記紀の神話が重要な地位を占めるものではないかという気がする。

以上はただ一人の地球物理学者の目を通して見た日本神話観に過ぎないのであるが、ここに思うままをしるして読者の教えをこ
う次第である。

(昭和八年八月、文学)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第四卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年5月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年6月13日第65刷発行

※底本の誤記等を確認するにあたり、「寺田寅彦全集」（岩波書店）を参照しました。

入力：（株）モモ

校正：かとうかおり

2000年10月3日公開

2003年10月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

神話と地球物理学

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>